

2021 年度
点検評価報告書

聖学院みどり幼稚園

1. 聖学院みどり幼稚園の教育目標

「神を仰ぎ 人に仕う」を聖学院全体の建学の精神(School motto)とし、「神さまの愛の中で、人と関わりながら、生きる力を育む。」を聖学院みどり幼稚園の教育の目標として、聖書が証しする神さまの言葉に耳を傾け、祈りつつ、「神と人ともに愛され、自主性を持ち、自発的に行動できる子どもを育てる」ことをめざします。

そのため本園では、具体的な教育課題として次の7項目を掲げています。

1. 遊びを通して子ども達の心身の成長(非認知的スキルの育成)をうながしていく。そのために、豊かな経験と知識を持った教員が子ども達の状況を適切に把握し必要な支援を行う。
2. 子ども達自身が個性を伸ばし成長できるための環境作り(個々の興味関心を満たす用具・遊具・自然などが十分に提供される)を重視する。
3. 広い園庭の中、たくさんの草花や樹木や小動物達など豊かな自然に触れ、いのちの大切さと素晴らしさを自らの身体で知る。
4. 礼拝を通して、一人一人には異なる個性と賜物があり、全ての者が神さまに愛されている存在であることを知ると共に、他者のために祈る心を養う。
5. 幼児・児童に対する英語教育の専門家であるネイティブ教員による「英語の時間」や、外国人留学生達との交流を通して様々な文化に対する理解を深める。
6. 音楽や自然体験・文化体験など可能な限り本物に触れることをめざした様々な活動を通して、自身の国の歴史や文化を知り、味わう。
7. 家庭との連携を密にすることにより、子育ての教育環境を整え、また子どもの幼稚園時代にはかできない経験を通して保護者自身も子ども達と共に成長していく。

2. 年間保育目標

2021年度年間保育目標:「神さまの愛の中で、人と関わりながら、生きる力を育む。」

2021年度聖句:「あなたがたはキリストの体であり、

また、一人一人はその部分です」

(新約聖書・コリントの信徒への手紙一 第12章27節より)

	健康の生活	交わりの生活	探求する生活	表現する生活
年少児	<ul style="list-style-type: none"> 身体を使って遊ぶ事を楽しむ。 身のまわりのことを自分でしようとする。 みんなと一緒にお弁当やおやつを食べることを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 神さまに愛されていることを知る。 友だちと一緒にいることを楽しみながら生活する。 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろなことに興味を持ち、やってみる。 喜んで神さまのお話を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ありのままの自分を表す。 自分の気持ちを言葉で伝えようとする。 歌ったり、描いたり、作ったり身体を使って表現することを楽しむ。
年中児	<ul style="list-style-type: none"> 自分の力を充分に使って遊ぶことを楽しむ。 身のまわりのことを自分でする。 食べ物を与えてくださる神さまに感謝し、友だちと楽しく食べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 神さまに愛されていることを知り、喜んで讚美し祈る。 友だちに関心を持ち、一緒に生活することを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 神さまやイエス様のことについて知る。 身のまわりの出来事に興味や関心を持つ。 考えたり、工夫することを楽しみながら、自分でいろいろやってみる。 身近な自然に触れ、楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ありのままの自分を表す。 自分の思いを言葉やいろいろな方法で伝える。 いろいろな表現の仕方があることを知り、共に楽しむ。
年長児	<ul style="list-style-type: none"> 健康や清潔の習慣をすすんで身につけ、生活の仕方を知る。 工夫したり試したりしながら、自分の力を十分に使い、思い切り遊ぶ。 食べ物大切さを知り、感謝して友達と楽しく食べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 神さまに愛され、守られていることを知り、喜んで讚美し祈る。 いろいろな人の考えや気持ちが分かり、共に生活する。 一つのことをみんなでするとの喜びを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 神さまやイエスさまのことについて知り、関心を深める。 いろいろなことに興味を持ち、考えたり、調べたり、工夫したりすることを楽しむ。 自然の変化を感じ、動植物と共に生活することを楽しみ、生命の大切さを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 感じたり、考えたりしたことを言葉で伝え合う。 いろいろな表現の仕方を体験し、自分の思いを表す楽しさを知る。

3. 2021年度の目標や計画を基に設定した 幼稚園評価の具体的な目標

評価項目に沿って、本務教員及び補助教員(非常勤)による自園及び自身の自己点検を実施することにより、また、在園児保護者への幼稚園生活に関するアンケートの結果を踏まえ、教員自らが第三者の立場に立って客観的に自己の活動を振り返り、自己評価を実施することによって自園と自身を適切に見る目を養い、本園の施設・設備や教育内容の課題を自覚し、改善に向けてそれぞれが主体的・積極的に関わり取り組んでいくことを目標とする。

4. 園としての評価項目の達成及び取組み状況

評価段階(A:よくできている、B:できている、C:あまりできていない D:全くできていない)

評価項目	評価	取組状況
I. 教育内容		
保育の計画と実施	A	建学の精神に基づき、中長期的な教育目標及び年度毎の保育目標を明確にしている。また、教育課程は保育目標に基づき、新教育要領の精神を踏まえ適切に編成している。具体的には、子どもの遊びをカリキュラム化し、年間をⅧ期に分け、それぞれに指導目標を定めている。2021年度は新型コロナウイルス感染症の影響(以下、「コロナ禍」と言う。)のため、園行事を精査し、中止とするもの、規模を縮小するもの、内容を変更して実施するものなど、地域の感染拡大状況や各家庭・園児達の現状や実態を考慮しながら判断し、諸活動を実施した。今後は、園児の体験や経験を重視し、それを基盤として成長を促すためのカリキュラムについて、さらに検討して行くこととしたい。
教職員体制	B	教職員が園の教育目標や年間保育目標を共通理解するために、本務教員については原則として毎日保育後に報告会や連絡会を行い、保育が教育要領、教育課程、園児の実態に即したものになっているかを確認し、また相互に意見を出し合うなど意思疎通を図る機会としている。さらに、補助教員やその他職員達に対しては、話し合いの内容を文書にして毎朝確認できるようにしている。今後は、園の教育目標や年間保育目標を共通理解をより深めるために、教職員研修会を行うこと、年度末にカリキュラムの見直しを行うことが必要である。また、教職員が上級の免許を取得したり、他の資格を取得するための機会を意識して持たせるようにしたい。

指導のあり方	A	<p>教員一人一人が、本園の環境を通して行う幼稚園教育の特質を理解し、園児の発達の見通しを計画的に環境構成を行っていきけるようにしている。そのような環境を整えた上で、本園の指導の特質として園児個人々の成長や発達の違いに十分配慮しながら自由な遊びを通しての総合的な指導を行っている。また、園児との関わりにおいて信頼関係の構築のため、園児の主体性と教員の意図とのバランスに配慮しつつ、園児一人一人が安全で心地よく過ごすことができるように工夫している。これらの事柄について、本園は恵まれた環境にあるものの、常に見直しを行なって行く必要がある。また、幼児一人ひとりの発達の特性に応じた指導を深めて行くため、幼児の発達特性について学ぶ機会を持つようにしたい。また、年間カリキュラムの反省会などを通して、遊びを通しての総合的な指導について話し合う機会を持ちたい。なお、成長や発達に課題がある園児に対しては、発達に関するアドバイザーによるカンファレンスを行っているが、家庭との連携をより十分に行う必要がある。2021年度はコロナ禍ということもあり、小学校との交流のプログラムが行えなかったが、いずれ復活させたい。</p>
研修や研究	C	<p>園の教育方針や年度目標を理解し、さらには教育内容の質の向上や改善を目的として補助教員を含む全教員による園内研修や懇談会を年間数度実施した。なお、教員の資質向上のために、これまでは長期休暇期間中や土曜日、及び午後に保育を行わない水曜日などを利用して、「埼玉県」や「さいたま市」、さらには「私立幼稚園協会」や「キリスト教保育連盟」などの公的機関が開催する研修会などに定期的に参加するようにしていたが、2021年度に関してはコロナ禍によりそれらの研修会が中止となったり、オンラインによる開催になったり、それらへの参加は難しかった。そのため、内部研修として成長や発達に課題を持つ子どもへの対応などに関して、現在本園に関わって下さっている「発達支援アドバイザー」（聖学院大学人文学部特任教授）をお招きしてのカンファレンスを実施した。今後は、特定の課題を想起した園内研修を行ってゆきたい。また、教員がベテランが多いこともあるが、若手教員にも学びの機会を与えてゆきたい。点検評価によって年度当初に各教員の課題や目標を明確にし、学期毎に進捗状況を把握して行きたい。</p>
Ⅱ. 地域の幼児教育センターとしての役割		
子育て支援	B	<p>子育て支援及び本園の保育への理解のために、就園前の幼児を持つ地域住民等を対象に「園庭開放」や「親子で遊ぶ会」の他、未就園児親子クラス(たまご組〈1～2歳児〉、ぐり組・ぐら組〈2～3歳児、第Ⅲ期以降は入園予定者のみ)を実施し、また、必要に応じて子育て相談や子育てに関する情報の提供などを行った。なお、外部のさまざまな教育に関する相談相談を受け入れることは、行っていない。</p>
預かり保育(オリーブクラス)	A	<p>2020年度よりさいたま市の「子育て支援型幼稚園」に認定されたことを受け、朝午前8時から保育開始時間前まで及び保育終了後から午後6時まで、土日祝日、園閉鎖期間を除いて原則として毎日オリーブクラスを実施している。なお、</p>

		<p>オリーブクラスは園の教育課程を特に考慮して行っている訳ではない。長年預かり保育を担当してくださるベテラン教師の他、聖学院大学より学生アルバイトやボランティアなどを受け入れている。</p>
<p>Ⅲ. 安全管理</p>		
<p>外部侵入者・来訪者などに対する安全対策</p>	<p>C</p>	<p>本園には正門と裏門があるが、多くの保護者は自家用車で園児の送迎しているため大学駐車場がある裏門を利用するが多い。正門、裏門とも職員室及び事務室にてカメラ付インターホンで相手を確認し解錠するシステムとなっているが、それぞれの入り口が園舎より離れているため本人確認が十分にできない場合がある。また、解錠・施錠装置の経年劣化等もあり保護者等が園内に立ち入った後の施錠が十分ではない場合が時折あり、保護者には施錠の再確認をお願いしている。園舎の改築に合わせて安全なシステムを導入したい。また、不審者が侵入した場合の対応マニュアルや訓練を行う必要がある。</p>
<p>施設・設備・園児に対する安全対策</p>	<p>B</p>	<p>大地震や火災など様々な災害への対策として、毎回テーマを設定して園全体の防災避難訓練を年間4回程実施しているが、今後は、回数を増やすことや、実際の状況に合わせたより綿密かつ具体的な防災計画を行うこととしたい。園舎やプレイルーム等は耐震強度的には安全基準に適合しているものの、築40年を超え外壁の劣化や給排水設備、電気系統の老朽化が進行しており、園児の安全性を第一にこまめな点検や修繕を行っている。また、設備や遊具の点検は毎朝園児達の登園前に本務教員、補助教員らで行うようにしているが、今後は時間を設けて、教員全員で設備や遊具のチェックを行うようにしたい。</p>
<p>衛生管理</p>	<p>A</p>	<p>学校保健法の定めに従い、校医、歯科医師、薬剤師を非常勤としてお願いし、健康診断、歯科検診、水質調査・照度調査などを定期的に行っている。2021年度はコロナ禍により、通常以上に園児達の手洗い・うがいの励行を徹底し、保護者や外部者の園舎内立ち入りの際にはアルコールによる消毒やマスク着用をお願いした。教職員のマスク着用については、保育への様々な影響等を考慮しながら、必要に応じて着脱している。なお、保健安全計画については、教職員全員に周知し、計画を共有する必要がある。</p>
<p>Ⅳ. 人事管理</p>		
<p>園の教育目標達成のための人事</p>	<p>B</p>	<p>本園では原則として、幼稚園設置基準に基づくクラス規模及び担任を配置しているが、成長や発達に課題を持ち支援を必要とする園児も各学年若干名在籍する。そのため、それぞれのクラス負荷状況に応じてクラス補助教員を配置している。但し、指導の考え方として補助教員を含む全教員が全園児の名前と個別の状況を把握し、全員が対応できるようにしており、補助教員も必ずしもクラス固定としているわけではない。その時々状況に応じて変更や入れ替えなどを行いながら、園の教育目標達成のための最善の人員配置を行っている。なお、幼稚園設置基準にを踏まえ、個々の教職員が自己評価などに努めることについて、以前は各教員の学期報告の中に加えていたが、最近は行っていない。</p>

教職員の雇用条件と労務管理	A	本園は学校法人聖学院(本部:東京都北区。幼稚園2園、小学校、男女それぞれの中学校・高等学校、大学・大学院)の内の一教育機関であり、人事・労務管理は学校法人聖学院の規程に従って行われている。本務教員の待遇等は人事関連諸規程及び幼稚園教員給与規程(東京都幼稚園教諭基準に準拠)に基づいており、また、産休・育休制度、休職制度なども整備されている。
教職員の健康管理	B	学校法人聖学院の就業規則及び諸規程に従い、年一回の健康診断が義務づけられている。但し、本園は幼稚園としては比較的小規模であり教職員数もそれほど多くはないため、教育目標の実現のために一人一人にかかる負担は大きいものとなっており、教職員の心身の健康管理が今後の課題である。
V. 財務管理		
予算作成及び予算管理、決算	B	本園は学校法人会計基準に基づき予算書を作成し、月次の予算管理を行っている。また、同基準に従った会計処理を行うと共に財務計算に関する書類を作成している。さらに、決算は公認会計士の監査を受け、適正であることの証明を受け監督官庁に届け出ている。なお収支に関しては、小規模園であるために学納金収入、補助金収入などと比較して人件費、修繕・維持管理費、通園バス関連経費等が大きく負担となっており、そのため支出超過となっている。本園がめざす保育を実現するためにはある程度の経費の増大はやむを得ない面もあるが、収支改善は創立以来の課題ともなっている。これらの課題に対応するため、2022年度より、子ども・子育て支援新制度(以下、「新制度」と言う。)の施設型給付を受ける幼稚園に移行するための準備を1年間かけて行ってきた。
納付金算定	B	園児納付金の算定に関しては、学校法人会計基準に基づき行っているが、地域の他幼稚園等との比較や収支のバランス等を見ながら納付金額の算定を行っている。外部からの質問等があった場合には、しっかりと答えられるようにしたい。なお、2022年度からの新制度への移行に伴い、園則における保育料等納付金の項目および「特定教育・保育の向上を図るために要する費用の別表」「特定教育・保育の提供に要する実費に係る利用者負担」の別表を整備した。
物品購入	A	教材などの在庫は、教育方針及び当該年度の教育目標を踏まえ、種類・量共に適切に管理している。
VI. 評価と情報公開		
評価	B	自己評価は行っているが、園としても個人としても、年間の重点目標を定めることは行われていない。学校関係者評価は、園の点検評価結果を提示し、それに対する意見交換の形で行う必要がある(卒園生保護者、卒園生)。その他、第三者評価(外部識者、理事会、近隣住民など)は行われていない。毎年度末に実施する全保護者への「幼稚園生活アンケート」の結果も踏まえてより良い評価を行なって行きたい。2021年度の自己点検・評価報告書については、2022年度に新制度に移行したため、学校関係者評価の実施およびHPへの公開が遅くなった。

<p>情報公開</p>	<p>C</p>	<p>前項「自己点検・評価報告書」の他、学院全体の「事業報告書」が毎年刊行されており、本園の教育及びその他の運営の状況等についての報告、及び財務諸表が冊子として、またインターネット上に公開されている。また当該年度卒園生については、幼稚園における幼児指導要録の抄本・写しを進学した小学校に送付し、情報の共有と相互理解を図っている。</p> <p>2021 年度の日々の幼稚園の活動の様子などについては、ホームページ(ブログ)等への情報公開は不十分であった。</p>
--------------------	----------	---

5. 教員自身による自己評価結果

評価段階(A:よくできている、B:できている、C:あまりできていない D:全くできていない)

評価項目	評価	内 容
I 保育の計画性		
園の教育理念・教育目標の理解	A	<p>補助教員を含めた殆どの教員は園の教育理念を把握し、理念に基づいた教育目標に関して理解している。特にキリスト教幼児教育についての理解を深めることにより、園の教育目標の実現に協力・貢献できている。</p>
幼稚園教育要領の理解	B	<p>本務教員は、幼稚園教育要領を読み、理解し、必要な場合には園長や主幹、同僚教員等と話し合うことが概ねできている。なお、補助教員については、幼稚園において学びの機会を設ける必要があると思われる。</p>
教育課程の編成	A	<p>教育課程は、幼稚園教育要領の精神を踏まえ園の教育理念や目標を基に1年間をⅧ期に区分して編成し、それに基づき保育計画を立てている。なお、教育課程の編成は主として本務教員によって行われているが、補助教員についても本園の教育方針に基づく教育課程への理解が概ねできている。</p>
指導計画の作成	A	<p>幼児の発達に即し、幼児期に相応しい生活が展開できるよう編成された教育課程に基づき、週案、日案等の具体的指導計画をクラス毎に作成している。その際、園児の状態や地域の状況の変化に対応できる順応性あるものとなるよう各担任が工夫して作成するようにしている。なお、補助教員についても指導計画への理解を求めているが、ほとんどの場合問題なく協力いただけている。</p>
環境の構成	A	<p>環境の構成については、期毎の教育課程編成時に基本的な環境設定も行っており、楽しい雰囲気の中で安心して遊び込める環境を構成するよう注意を払っている。なお、遊びに必要な遊具や用具、素材などを質・数量に配慮して準備することや、園庭の樹木や草花などの季節による変化について自身の理解を深めることについては、今後より深めて行く努力をしたい。</p>
II 保育のあり方、幼児への対応		
健康と安全へ	B	<p>園児のケガや事故に気をつけ、万が一発生した場合は園長や主幹に報告</p>

の配慮		し、保護者と連絡を取り、さらに必要な場合には医師に診てもらするなど適切な処置を行っている。また、園児の登園前には遊具等に危険箇所などがないか点検すると共に園内の清掃や整理整頓、換気、採光、室温なども常に気を配るようにしている。また、園児が登園した際には体調について視診を大切にし、問題があると思われた場合は速やかに保護者に連絡するようにしている。しかしそれでもなお、12月に満三歳児が自由遊び中に大型積み木の上から落ち、右肘を骨折する事故が起こっている。園内において改めて安全への配慮について確認をした。
幼児理解	A	常に園児の姿を多面的に捉えるように心がけ、園児の話しをよく聞き、思いを受け止めることに全教員が努めている。そのため、一人一人の園児をよく観察するようにしている。
指導とかかわり	A	園児を無視したり体罰を加えることはどのような場合であっても決してないよう全ての教員に徹底している。本園の基本的な指導の姿勢としては、園児一人一人のありのままの姿を受け容れ、その子の良さを十分認めるよう心がけている。
教員同士の協力・連携	A	園児への対応については、本園ではクラスに関係なくその場にいた教員が適切な言葉がけや対応することを求めているが、ほぼできていたものと考えている。そのため、原則として毎日保育後に園児達の状態や様子について本務教員同士で話し合い共通理解するよう心がけており、さらに補助教員についても、その話し合いの記録を翌朝確認できるようにしている。なお、保育者同士が環境構成や園児のことについて、より率直に話し合えるような配慮が必要である。
III 教員としての資質と能力		
専門家としての能力・姿勢・義務	A	教員は職務上知り得たプライバシーに関する園児や家庭の個人情報などの秘密を厳守すること、服装や身だしなみなどに十分注意を払い、園児や保護者との対応には公平さを欠かさないようにすることなどを徹底している。さらに、本務教員(クラス担任)については、保護者に対して園児の状況や自らの保育のことをわかりやすく説明し保護者との信頼関係を築くことに努め、幼児教育者としての意識を常に高く保つよう心がけている。
組織の一員としてのあり方	A	本務教員、補助教員を問わず、教職員全員で一つのチームであることを十分認識し自覚している。なお、保育者同士が、より素直な気持ちで他の意見を聞いたり自分の意見を述べるような配慮が必要である。
保育の楽しみ・喜び	A	ほとんど全ての教員が、幼稚園教諭として園児の成長を自分の喜びと感じ、園児と一緒に生活を創りだすことに誇りと自覚を持って教育にあたっている。
IV 保護者への対応		
情報の発信と受信	A	保護者に対し個々の園児の状況や様子を伝えることに工夫をし、また保護者からの相談や要望に対してはできるだけ心を開いて話しを聞くよう心がけている。次年度にはクラスだよりをもう少し多く出せるように心がけたい。
守秘義務の遵	A	本務、補助教員を問わず、基本的に個々の園児や保護者、家族等の情報は

守		口外されることはなく、個人情報の管理に関しては幼稚園として徹底できていたと考えられる。
対応上のマナー・心構え	A	その場にあった適切な言葉を用い、保護者からの依頼や伝言にはできるだけきちんと対応するよう全ての教員が心がけていた。
クレームへの対処の仕方	A	保護者から何らかの指摘等があった場合は、まず謙虚に保護者の話を伺い、その内容によって園長や主幹に報告し、さらにその結果については、教員全体で共有するよう心がけている。
V 地域の自然や社会とのかかわり		
地域の自然・人々とのかかわり	B	隣接する聖学院大学内には自然を体感できる場所も多くあり利用させていただいている。近隣地域への対応に関しては、ご迷惑をかける可能性がある園行事等の前にはご挨拶に伺うこともあり、また毎年行っているバザーなどには地域の方々も多く参加下さっている。但し、2021年度も多くの行事がコロナ禍により中止となった。なお、日常の活動においては、本園は地域の行事や自治会等への参加などは十分に行っているとは言えない状況である。
小学校との連携	B	本園からは東京都北区の学院内の小学校へ進学する園児が毎年数名いる。しかし基本的には地域の公立小学校へ進学する者が大半であり、園としてはそれらの小学校との連携は最重要課題の一つと考えている。そのため年長児は近隣の小学校との連携・接続プログラムに積極的に参加するなどしている。但し、2021年度に関してはコロナ禍によりこれらのプログラムのほとんどが中止となってしまったことは残念であった。
子育ての支援と地域への開放	A	子育て支援や園の開放などの地域への貢献については、2021度はコロナ禍により例年度よりは縮小されたものの、近隣の未就園児の親子を対象に、時間を定めて園庭を開放するなど遊びと交流の場を提供している。
VI 研修と研究		
研修・研究への意欲・態度	B	本務教員については、長期休暇期間中や水曜日の午後、土曜日などに実施される研修会や研究会等に、それぞれの保育に関する自己課題をもって積極的に参加するように努めている。また、補助教員については、研修の機会が少ない状況である。
教員としての専門性に関する研修・研究	C	教員としての資質向上のため、幼児の発達理論を学んだり、教育課題や指導計画などに関する研修や研究には多くの教員が関心を持っているものの、2021年度については園としてのコロナ禍への対応に追われる場合が多く、学びへの参加については十分に行えたとは言えない状況である。また、補助教員については、研修の機会が少ない状況である。
今日的課題に関する研修・研究	B	本園では教育的な観点から、成長や発達に課題を持つ幼児やアレルギー・自立遅れなどの幼児を一定数園児として受け入れており、そのような園児への理解と対応などについて関心を持ち、研修などにも参加するなど比較的積極的に取り組んでいる。2021年度については、外部研修への参加は難しかったもの

		の、園内での研修という形で勉強会等を行った。また、補助教員については、研修の機会が少ない状況である。
--	--	--

6. 幼稚園評価の総合的な評価結果

《評価項目》 A…十分達成されている B…達成されている C…取り組まれているが十分でない D…取り組みが不十分

結果	理由
B	<p>はじめに</p> <p>2021年度はコロナ禍への対応をしつつ、日常の生活や行事を取り戻して行くために試行錯誤した1年間であった。2020年度の時のような長期間の臨時休園はなかったが、教職員も必要に応じてマスクをつけたりするなど、工夫をしながら日々の保育を展開した1年であった。</p> <p>自己点検・評価による効果</p> <p>本園が自己点検・評価を実施するようになって5年目を迎えた。このことを通して自身の日常の保育活動を振り返り、幼稚園教員としての現状を把握し、それぞれが取り組むべき課題が明確になってきているのではないかと思われる。さらに園全体としても、教育活動やその他運営に関して改善、改革すべき課題等が明らかになってきている。これからも、常に自園の問題点や課題を把握し、より質の高い教育や保育の実践に向けて一層前向きに取り組んでいきたい。</p> <p>保育についての評価</p> <p>本園は創立以来、「遊び」を中心とした人間教育、非認知的能力育成型の教育・保育にこだわってきた。そのため過去には“変わった幼稚園”との評価をいただいたこともあった。近年は幼稚園教育指導要領にもあるように、多くの幼稚園が遊びを大切にすることを標榜するようになったが、その先駆的な役割を担ってきた本園としては、子どもの成長につながる遊びの「質」の一層の充実をめざした保育に転換してきている。</p> <p>その結果、保育や教育に関する保護者の方々の満足度は毎年度末に行われる保護者による「幼稚園生活アンケート」の結果を見ても十分高いと評価されているが、2019年度後半から「さいたま市子育て支援型幼稚園」となったこともあり、共働き世帯が増えていることが従来のみどり幼稚園保護者と意識の変化が見られる部分もある。本園としては、常に子どもの成長や発達、非認知的能力やスキルの育成を最重要教育課題として諸活動を行っていく必要を感じており、保護者の幼稚園に対する依存が過大となり過ぎぬよう常に家庭との連携を念頭に置きつつ、より良い協力体制の下で子ども達の成長のための支援を行っていきたい。</p> <p>施設・設備についての評価</p> <p>施設・設備の面において特に本園としては環境整備に力を入れてきたが、2021年度はコロナ禍の状況にあって広い園庭を持つ幼稚園のメリットを十分に活かし、子ども達が安心・安全に幼稚園生活を送り活動を行える環境となるよう配慮してきた。一方で、創立43周年を迎え</p>

て現在の園舎は耐震性等に大きな問題はないものの特に給排水等の水回りや電気系統など施設・設備面での経年劣化や老朽化が進みつつあり、近年、保護者からも改善の要望が多く出されるようになってきており、園舎及びプレイルームの建て替えや改修等の具体的計画を進める必要がある。

管理・運営についての評価

管理・運営に関しては、幼稚園から大学までを持つ学校法人聖学院の一教育機関として、学院全体のルールの下で管理・運営が行われている。そのため、通常の私立幼稚園として担わなければならない諸々の問題について免除されているメリットがある一方で、幼稚園としての特殊事情に十分配慮した管理・運営ができない場合があるというデメリットもある。他にも隣接する大学施設(チャペル、グラウンド、駐車場、体育館、食堂、送迎バスなど)を利用したり、外国人留学生との交流や大学教員の支援を受けられるなど、他の幼稚園には見られない条件が整えられている。

但し財政面では、100人程度の小規模幼稚園として創立以来ほとんど採算がとれない状況が続いているが、将来の園舎建て替えや改修などを考えた場合、収支の改善が必要であると考えられる。なお、本務教員は本園の教育目標の達成のために豊富な経験や高い能力が求められているが、そのため年齢構成が比較的高齢になりがちであり、将来に向けてスムーズな世代交代を図っていくことが望ましい。

安全面に関しては、園舎全体の老朽化に伴って設備等に不具合が多く生じてきており、また、園庭の大型固定遊具についても同様である。現在は園児の安全性を第一に最小限の修繕を行っているが、近い将来には全面的な改修等が必要になると思われる。またセキュリティシステムも時代遅れとなりつつあるが、施設・設備の更新に合わせた対応を考えていかねばならないだろう。

7. 今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
幼児教育のさらなる充実(家庭との連携)	<p>幼稚園教育は義務教育ではないものの単なる知識の伝達や、計算能力や運動能力などのスキルアップなどではない。人間としてこれからの人生において必要となる「人や物事に興味や関心を持つ」、「一生懸命夢中になって取り組む」、「仲間と協力する」などいわゆる非認知的能力を身に付けることであると本園では考えている。しかしそうではあっても、子どもの生活の基盤は基本的には各家庭にあり、幼児期の教育をより効果的に進めていくためには、園生活と家庭生活を切り離して考えることはできない。もし家庭での生活リズムが整っていなければ、その影響は園生活にも及ぶことになり、また逆に園での生活や活動体験も、その子どもの家庭生活に何らかの形で影響を与えることになる。そのような意味で保護者と教員の間のコミュ</p>

	<p>ニケーションがうまく図られ、家庭と幼稚園それぞれの場における子どもの様子や教育方針などをお互いに共有することを通して相互の理解と信頼に基づいた協力関係が成立することになる。</p> <p>そのため本園では、従来より朝夕の園児の送迎を可能な限り保護者自身にお願いしたいこと、また、保護者の方々の行事への参加や保育参観、さらには保護者例会などを重視してきた。しかし近年、共働き世帯の増加に伴って保護者からは、親の負担をできるだけ軽減して欲しいという要望も少なからず増えつつある。各家庭における幼稚園教育に対する期待への温度差も広がりつつあるとも言える。そのような中で、現在、家庭と幼稚園との新しい連携のあり方が問われている。園児へより良い教育を提供したいという本園としての願いと各家庭からの要望とをどのように折り合いをつけていくべきか、これからの幼稚園の重要な課題と考えている。</p>
<p>幼児教育のさらなる充実(低年齢児幼児教育の在り方)</p>	<p>近年社会的要請が強まっている低年齢児を対象とした幼稚園教育(保育)のあり方と関連して、本園においても満3歳児入園者数が増加傾向にある。さらに地域によっては、2歳児からの幼稚園への受け入れが話題になることもある。しかし幼稚園教育は、幼児の集団に対して体系的にかつ組織的に学ばせる教育であるため、2歳という年齢は社会的活動を行うための準備が必ずしも十分できているとは言い難い面がある。</p> <p>本園においては、2歳児のクラスを未就園児親子クラスとして週一回定期的に行っている。だがそれは、あくまでも幼稚園生活の体験であり正式な入園ではない。しかし保護者や子どもにとっては、幼稚園の雰囲気が分かる上に入園後のミスマッチをある程度予防できるというメリットがあることから毎年希望者は増えつつある。</p> <p>体と心を動かす「幼児の脳」は、3歳までに約80%完成すると言われる。「こころ」が育まれる環境も脳がつくられる胎児期の初期から始まり、3歳頃までにその基礎がほぼできあがると言われているが、別の言い方をすれば3歳までの育て方で、その後の人生の基盤は大きく影響を受けることになる。そのような観点から、この時期の子どもにとっては家庭教育が非常に重要と言えよう。そのような中であって、本園の未就園児親子クラスは、通常の幼稚園教育とは異なり、体系的に、組織的に何かを学ぶというよりは子どもが保護者と一緒に遊ぶことを大切にする、またそのような中で少しずつ集団生活を体験する、といった側面が強調されている。具体的な活動内容については、幼稚園は子どもが遊びに集中できる環境を整え、子ども自身の興味や意思を尊重し遊びは強要しない。おはよう、ありがとうなどの挨拶をする、みんなと一緒におやつを食べたり作業を行う、教員や保護者による絵本の読み聞かせをする、などが中心になっている。</p> <p>今後、益々低年齢児受け入れのニーズが高まることが予想される中、まずはこのような低年齢児の発達特性についての十分な理解を園全体として共有理解として確認する必要がある、そのことを踏まえつつ低年齢児の幼稚園教育の可能性についてさらなる研究、検討を続けていく必要がある。</p>

<p>幼稚園収支の改善</p>	<p>本園の教育は、教員が園児達の様子をきちんと把握するところから始まる。一人一人の園児の状態は全員異なり、同じ園児は一人もいない。そのような園児をきちんと把握した上で、それぞれに必要な支援を行うのが本園の教育の基本である。そのために教員にはそれなりの経験が必要であり、単なる知識として学んだだけでは本園の教育に対応することは難しい場合も多い。従って本園の教員は本務、補助を問わず必然的に経験豊富な教員が多くなっている。</p> <p>財政的な観点からすれば、教員の入れ替えなど回転率をあげることが人件費の削減に繋がるが、本園では目標とする幼児教育の実現の為に教員の質と量が重要であるとの観点から人件費が膨らんでしまう傾向がある。さらに、他園に比較して恵まれた園庭の環境を維持し質の良い遊具等を整備するための費用などから、財政的には慢性的に赤字傾向が続いている。</p> <p>但しそのような中にあっても、学校法人聖学院は幼児教育の重要性を十分認識し、これまで多少の赤字は容認されてきた面があるが、今後は老朽化した園舎やプレイルーム等の建て替えや改修、大型遊具の更新などのことを考えた場合、可能な限り毎年度の収支はバランス取れたものへと変えていく必要がある。このことから、2022年度より、子ども・子育て支援新制度のうち、施設型給付を受ける幼稚園に移行するべく、準備をした1年でもあった。</p>
<p>施設・設備の改善</p>	<p>園舎やプレイルーム等の施設・設備の改善は、現在みどり幼稚園が抱える最も重要な課題の一つである。保護者によるアンケートの結果を見ても、半数以上の方が園舎やプレイルーム、さらには一部の大型遊具等の老朽化を指摘している。この問題は上述した収支の改善とも関わってくるが、今後50年、60年と園を継続して行くためには避けて通ることができない課題となっている。そのため現在は、学院全体の協力を仰ぎながら園としての収支の改善に取り組んでいるが、2022年度より、現在のみどり幼稚園の良さを損なうことのない範囲で、子ども・子育て支援新制度のうち、施設型給付の幼稚園への移行し、将来的な改築に向けて本格的な準備を開始する予定である。</p>
<p>安全対策への取り組み</p>	<p>幼稚園は、若い園児達を預かり指導・教育する機関として何よりもまず園児の健康と安全を守る義務を負っており、普段から安全への備えと意識を持っている。また、万が一の事故の際の対応を的確に行い、園と保護者との信頼関係を維持し、深め、そのことを通して社会的な信用や信頼を守ることも重要となる。</p> <p>幼稚園で想定される危険は、①保育活動に伴うケガなどの事故、②食品や水の汚染等による食中毒や感染症、③火災・地震等の災害、④不審者の侵入による事件などが考えられる。これらの対策としては年間安全計画の策定等により①については遊具や園庭、施設・設備等の恒常的な点検や日常的な安全指導、②については定期的な水質検査や遊具等の衛生管理、③については非常時に備えての防災訓練、④については不審者が入りにくい環境整備や監視体制などがあげられる。2021年度も前年度に引き続き、コロナ禍に伴っての安全対策が園にとっての最重</p>

	<p>要課題であった。具体的対策として、園児に対してはこれまで以上に手洗いやうがいの励行を、教員に対しては必要に応じたマスクの着用や園児等との距離を適切に保つこと、また遊具や手指等の定期的な消毒を、さらに保護者には入園の際の手指の消毒や保護者同士の距離を確保することなどをお願いしてきた。</p> <p>安全対策は、その危険度をどのように判断するかによって対策もおのずと変わってくるが、100%の対策というのは現実的には困難である。その意味で、万が一事故や災害が発生した場合の対応が重要となる。新型コロナウイルスに関しては、万が一のようなレベルで感染が発生・拡大したかにより、園としての基本方針は決まっている。さらに上記①から③についても一応の対策が決められている。しかしながら④の不審者による侵入対策と対応が現在本園にとっての大きな課題ではないかと考えられる。幼稚園は一般的に女性が多い職場であり、それだけに狙われやすい条件にあるとも言えるが、不審者の侵入を未然に防ぎ、侵入された場合の対応についてマニュアル化しておくと共に、教員の意識づけと普段の訓練の強化を行う必要がある。またハード面でも、侵入者は門から入るとは限らないため、幼稚園出入のセキュリティ強化と監視用モニターを増設することなども検討する必要がある。</p>
<p>自己点検、自己評価 活動の充実</p>	<p>卒園間近の保護者に対する「園生活アンケート」は7年を経過した。いずれの年も、園児にとっても保護者にとっても園に対する満足度は10点満点中8点を超えている。その後、全保護者に対してアンケート調査が拡大され、園の内部資料としての自己点検・評価がなされている。2021年度の点検・評価の実施については、翌2022年度が、子ども・子育て支援新制度のうち施設型給付を受ける幼稚園への移行の初年度であること、これまでの主幹教諭が退職され新しい主幹教諭の体制となったこと、新規採用の特任の幼稚園教諭が3名いたことなどから、大幅に遅れることとなった。今後は年間スケジュールを見通しながら、行って行くこととしたい。</p> <p>また、現段階で本園としては「第三者評価」は行ってはいない。今後は自己点検・評価が園の独りよがりのものでなく、公正・中立な立場の第三者の評価を通して、様々な意見や要望を整理・分析し、園の改善につなげていくような仕組みが求められることになろう。本園では、学院内に保育者養成を行う大学があることから、今後、幼児教育の専門家のご意見や評価なども伺うことができるシステムを構築していきたい。</p>

8. 幼稚園関係者による評価

課 題	具体的な感想・意見・提案
2022年度在園児保護者(9名(2022年度クラス委員))	
運営方針	<ul style="list-style-type: none"> ・運営方針や教育理念が明確にされており、それを実践する取り組みが様々な面で行われると感じる点について高評価。 ・教育・保育目標や、日々の連絡事項を家庭と共有できることで、より子どもたちの園生活が安心し、充実できていると感じる。
保育者	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者が、ひとりひとりの発達や個性に合わせた対応してくれることで、子どもも満足して活動に取り組み、その結果を親も満足して受け入れることができる。また、保育者が情熱的でよい。 ・教諭全員が全園児のことを認識しており、また、教諭同士の連携も取れているように感じる。子どもたちもどの教諭にも気兼ねなく話しかけている。それらのことは、この規模の保育からこそみられる姿だと思う。 ・キリスト教に基づく、子どもひとりひとりをありのままに認めてくれる保育を保育者が大切にしていることが分かる。園で起きる出来事や個々のケースへの対応方法を、保護者にも勉強会のような形で伝達する機会をもってもらえると、子育ての参考にできると思う。 ・誕生会や半日保育のおやつなど、どんなときにおやつを出すのか、事前に教えてほしい。 ・コロナ禍においても、必要に応じてマスクを外し、表情を見せてくれながら保育を進めてくれたこと、対策をしつつ子どもたちにとっても大切な行事を開催してくれたことに感謝。
園庭、施設	<ul style="list-style-type: none"> ・のびのびと遊べる広大な園庭が魅力的。焼き芋やかまどを利用した会食など、家庭ではできない体験をできて嬉しい。 ・園舎や園庭遊具の改善が必要に思われる。トイレの改修。プレイルームの老朽化への対応。 ・事故防止のためにも、園庭の木々の整備をこまめにしてほしい。 ・正門、裏門のセキュリティの強化希望。 ・オーブクラスの利用者に対して、保育者が少なく感じる時があった。

保護者

- ・園行事の数や親の参加しなければいけない会が多いと思われがちだが、園の方針や行事の説明などを丁寧に行うことで理解をしてもらい、また、必要な折り合いをつけてもらいつつ『みどり幼稚園だけのスペシャルなもの』を続けていってほしい。
- ・共働き家庭も増えていく中で、親の負担をできるだけ減らしたい要望もあるかと思うが、幼稚園に関わることを負担と感じず、子どもたちの集う幼稚園の為に力になりたい保護者もたくさんいる。そんな保護者の方々と幼稚園とがみんなで作り上げ、続けてきたからこそ、今のみどり幼稚園があり、卒園してもなお愛される幼稚園なのだと思う。
- ・幼稚園の為に時間をかけ、労苦を厭わない保護者と、幼稚園に利便性を求める保護者とで、協力体制に温度差を感じることは否めない。
- ・親も、素晴らしい仲間と子育てができたみどり幼稚園の保育がもっと広まってほしいと期待。

《学校関係者評価について》今回は 2022 年度のクラス委員の方に学校関係者評価委員となっていただきました。また、頂きました評価については、原文のままではなく、内容をまとめて表記させていただいています。